

明日香村豊浦隧道文様石の調査

平城宮跡発掘調査部

奈良県高市郡明日香村豊浦字金堂にある通称金堂山の地下に、飛鳥川から和田池に引水するための隧道が掘鑿されている。この隧道の石組に特殊な文様を刻んだ石が使われていることは、すでに石田茂作氏などにより紹介されているが、その内容はきわめて簡単であり、文様石発見の時期や状況、隧道に使われた経緯、その位置などについては何ら触れられていない。ただその文様石が向原寺境内に現存する文様石とともに、明日香村大字飛鳥字石神出土の須弥山像の石彫手法に通ずるということで、それとの関連で触れられており、今日では一般に飛鳥時代のもと考えられている。飛鳥・藤原宮跡調査室では、飛鳥地方の遺跡・遺物の調査の一環として、隧道と文様石の調査をおこない、隧道の構築に関して文献上で知り得たことがあるのでここに紹介し、合わせて石田氏の文様石に関する報告の補足としたい。

向原寺の南には、甘樫丘からつづく比高12~13mの低い丘陵が北にのびている。隧道はこの丘陵の、現在西念寺の位置する通称金堂山の地下を、丘陵を東西に貫通して掘鑿されている。隧道の規模は、幅約0.6m、高さ約1.4mで、長さはおよそ100mに達する。側壁には4~5段に石を積み、天井には一枚石を渡して構築している。

この隧道については、これまで植村氏が藩主であった時代に構築されたものと漠然と考えられていたのみで、確たる記録が明示されたこともなかった。今回調査の結果、豊浦在住の吉原貞市氏所蔵の「和田池之記」(写)と題する文書により、隧道構築の経緯や年代などに関

して以下に記すような事実が判明したので紹介したい。

本文書は、明治34年1月に記されたものを、3か月後の同年4月に書写したもので、幅32cm、長さ140cmの和紙2枚に墨書きされている。その内容は、明治34年にかつての高取藩14代藩主植村家壺が先祖の功績を記したものであるが、それによれば、「吾七世祖泰祥院愍之延宝八年庚申卜地干豊浦村始作池以蓄水天和元年辛酉四月工竣面積五千余歩名日和田池（中略）九世祖正善院尚憂水利未全正徳四年甲午再起工定水面一万歩築堰於飛鳥川通溝渠増堤防」とあり、天和元年（1681）に泰祥院（第2代藩主家貞）が現在豊浦字堤にある和田池を造ったことが知れる。「築堰於飛鳥川通溝渠云々」とあるのは、現在甘檜丘の麓を流れ、豊浦部落を抜ける用水路を指すのであろう。続いて「十二世諦観院安永四年乙未又憂溝渠迂回水利不便乃鑿隧道於金堂山若干間令近水源水利益便」とあり、安永4年（1775）諦観院（第7代家久）の時に隧道が構築されたことがわかる。しかし築造工事の模様や、文様石に関しては一切触れられていない。

今回、およそ100mにおよぶ隧道の石組に用いられている石材をすべて調査した結果、以下に記すように3か所で文様石を確認した。石田氏の報告では4個とされているが、かつて隧道の文様石が抜かれたという風聞もあるので、未確認のものはそれにあたるのかもしれない。

(1)は入口から8.2m奥の天井石にみられるもの。現在露出している約0.55m×0.6mの範囲に文様が認められる。

(2)は入口より14.6m奥の左側壁最下段の石にみられるもの。最大径0.85m、最大高0.5m^{*}、厚さ0.15mの、不整形に割った板状石の隅の部分にわずかに文様が認められる。

(3)は入口より22.5m奥の左側壁下から2段目の石にみられるもの。長径0.75m、高さ0.35mの不整平行四辺形の、現露出面一面に文様がある。三辺はいずれも割り面であるが、一边は加工面であり、文様がこの部分にもおよんでいる。

(4)は向原寺の薬師堂西の庭内にある石にみられるもの。この文様石の発見場所や時期、現位置に置かれた経緯などは一切詳らかでない。三側面を平坦に加工した幅0.8m、厚さ0.35mの石の上面に、幅約0.45m、長さ約0.7mの範囲に文様が彫られている。文様の一部は二側面にもおよび短側面の一方には仕口と思われる切り込みが造り出されている。

これらの文様石は、いずれも平坦に加工した花崗岩の石面に半肉彫りにより文様を表現しているが、何を表現したもので、どういう性格のものかは断片的なこれらの資料だけでは読みとることは出来ない。また、これらは互いに接合する部分もみられないので、同一個体か否かも不明である。

以上、隧道および文様石の調査結果を記したが、文様石に関しては従来以上には新しい知見は得られなかった。ただ、ここにとりあげたのは、隧道内で文様面が露出しているものに限られているので、隧道内にはまだ同類がある可能性は十分ある。現存する高取城の石垣とともに更に調査を重ねる必要があろう。

(安達厚三)